情動の帝国――探究のためのノート

水嶋 一憲

1 帝国論の新展開と情動論的転回

アントニオ・ネグリとマイケル・ハートが2000年に呈示した〈帝国〉という概念は、現在の世界とその現実について考える上でますます重要なプラットフォームになりつつある。またそれと並行して、21世紀に入り、グローバル化の進行のなかで政治・経済・文化の領域が複雑に絡まり合いながら、それぞれドラスティックな変容を遂げつつある今日、人文・社会諸科学における「情動論的転回」に大きな注目と関心が寄せられている。こうした帝国論の新展開と情動論的転回がどのような仕方で交わるのかを検討することから始めよう。

ネグリ＆ハートは『〈帝国〉』で、現在形成されつつあるグローバル秩序を諸種の領域を横断しつつくっきりと浮かび上がらせ、それを〈帝国〉と名づけた[1]。〈帝国〉とは――ある中心的な国家の主権とその拡張の論理にもとづく、かつての帝国主義とは異なり――、支配的な国民国家をもその節点として組み込んでしまうようなネットワーク状のグローバル権力のことである。

『〈帝国〉』はその刊行以来、アカデミズムの枠を超えた強烈なインパクトを多方面にあたえているが、その一方で、数多くの批判も浴びせられてきた。それらのうち代表的なものの一つは、9・11の攻撃とそれにつづく対テロ戦争を踏まえた批判、すなわち、かつてのブッシュ政権による単独行動主義な企てを通じて明らかになったのがアメリカ帝国主義への回帰にほかならない以上、『〈帝国〉』の予言は外れてしまったではないか、というものである。しかし結局のところ、21世紀最初のディケイド（いわゆる「ゼロ年代」）をとおして明らかになったのは、ネットワーク状のグローバル権力（〈帝国〉）の形成へと向かう流れに抗して企てられたアメリカ合衆国のクーデタ（「単独行動主義」や「アメリカ帝国主義」）が、軍事的にも経済的にも無残な失敗に終わった（イラク戦争の結末と金融危機が示すように）という事実である。さらに重要なのは、アメリカによる単独行動主義の失敗が、たんにアメリカの失敗のみならず、単独行動主義そのものの破綻を明示するものでもあったという点だ。中国であれEUであれ、今後いかなる国民国家や主権権力も、単独行動主義的な覇権を首尾よく行使することはできないだろう。私たちはいま、すでに屍となった「帝国主義」と新たに現出しつつある〈帝国〉とのあいだの移行期を生きているのである。

1
アントニオ・ネグリ＆マイケル・ハート『〈帝国〉』水嶋一憲・酒井隆史・浜邦彦・吉田俊実訳、以文社、2003年。これ以後、『マルチチュード――〈帝国〉時代の戦争と民主主義』（上）（下）幾島幸子訳、水嶋一憲・市田良彦監修、NHK出版、2005年につづき、*Commonwealth*, The Belknap Press of Harvard University Press, 2009が刊行され、ネグリ＆ハートの〈帝国〉三部作は一応の完結をみた。

現在の世界は、「二極化」(冷戦構造)でも「一極化」(アメリカや中国といった超大国をその中心とするようなグローバル帝国主義)でも「多極化」(支配的な国民国家群の支配する世界)でもなく、「無極化」すなわちネットワーク状のグローバル権力(支配的な国民国家や、超国家的な政治的・経済的制度、諸種のNGOやメディア・コングロマリットといった一連の権力のあいだの広範な協力関係(コラボレーション)からなるもの)、一言でいえば、中心も外部もない〈帝国〉の形成へと向かいつつある。こうした〈帝国〉との関係を抜きにして、グローバルな民主主義や未来の政治を構想することはすでに不可能となっている、と確言できるだろう。

しかも、このような〈帝国〉的権力は、いまや地球全体を覆いつつあるばかりか、人びとの生の奥深くにまで浸透しつつあるのであり、その意味でこれはグローバルな生権力とも呼ばれうる。加えて、後に見るように、グローバルな生権力としての〈帝国〉的権力は、諸個人を規律化することよりも、前個体的な身体能力としての諸情動を調整し、制御することにその力点を置いているのである。

ネグリ&ハートを中心とするこうした帝国論の新展開は、近年の人文・社会諸科学における情動論的転回の流れに呼応するものである。情動に焦点を合わせるこのアプローチは、近年唱えられた他の「転回」(言語論的転回や文化論的転回、等々)と同じく、諸種の学問領域で試行されてきた生産的な研究の動きを整理・活性化した上で、今後の探究のための新たな道筋を開こうとしている。と同時に、情動論的転回は――以前の言語論的転回や文化論的転回とは異なり――、触発し・触発される身体とその情動の諸相に照準することをとおして、従来の批判理論や権力理論のパラダイム転換、またひいては21世紀のグローバル社会における身体・テクノロジー・事物の新たな布置の解明をめざしている。

人文・社会諸科学における情動論的転回が有している深度と射程を理解するために、出発点として問わなければならないのは、そもそも情動とは何か、という基礎的な問いであろう。マイケル・ハートは、最近出版された学際的共同研究『情動論的転回』[2]に寄せた序文で、「情動の理論を最大限に推進した哲学者」としてバルフ・デ・スピノザの名前を挙げ、またスピノザの思考が、「この分野の最新の研究のほとんどにとっての直接的ないし間接的なよりどころ」となっている点を指摘している[3]。かつてスピノザが呈示した「情動(アフェクトゥス)」と「変様(アフェクチオ)」の概念は、今日の人文・社会科学における情動論的転回にとっての一つの理論的源泉となっているのである。

スピノザを淵源とする情動論的転回において、まずもって情動は、触発し・触発される身体の能力として定義される。またそれにともない情動は、個体的/人称的な感情としてではなくて、前個体的/前人称的な強度として捉え直されることになり、さらには、別の身体との出会いによって生じる変様、換言す

2
Patricia Ticineto Clough with Jean Halley(eds.), *The Affective Turn*, Duke University Press, 2007.

3
Michael Hardt, Foreword: What affects are good for, in Clough with Halley(eds.), *The Affective Turn*, ix-xiii.

れば、身体の活動力能の増大ないしは減少を含む持続として捉え直されることになる。このように情動は、間主体的という意味での〈あいだ〉において生じるものではなくて、主体や対象というカテゴリーに先立つ中間域――酒井直樹の的確な表現を借りるなら、「能動にも受動にも転じうるある微妙な両義的な瞬間」[4]――において生じるものであるとともに、活動力能の増大や減少といった推移として経験されるものなのである。ジル・ドゥルーズがその画期的なスピノザ論で指摘するように、「情動は状態のたんなる指示や表象ではなしにその推移を表し、二つの状態間の差異を含む持続をとおして体験される」[5]。そして、そうした両義的な中間性や横断的な時間性と深く関わりながら、触発し・触発される能力、前個体的な能力としての情動は、意識や意思に先立つ強度として諸々の身体のあいだを循環（サーキュレイト）・流通するのである。

以下では、このようなかたちで定式化されるスピノザ的な情動概念や情動のネットワークを、ともにその政治的かつ存在論的な基盤を構成する不可欠の要素として分かちもつ、帝国論の新展開と情動論的転回との動的な交錯に着目しながら、現在のグローバル資本主義やコミュニケーション資本主義の動きのなかで情動が果たすきわめて重要な働きの一端について分析を試みてみたい。

4
酒井直樹「情動の政治学」、『思想』、2010年第5号、岩波書店、193頁。

5
ジル・ドゥルーズ『スピノザ　実践の哲学』鈴木雅大訳、平凡社ライブラリー、2002年、185頁。

2　グローバルな制御社会と〈帝国〉の情動諸装置

帝国主義から〈帝国〉への移行は、規律（ディシプリン）社会からグローバルな制御（コントロール）社会への移行と重なり合うものとしても捉えることができる[6]。その意味で〈帝国〉は、近代の規律社会からポスト近代の制御社会への移行および、制御社会のグローバル化によって特徴づけられる、ネットワーク状の主権形態である、と言えるだろう。よく知られているように、ネグリ＆ハートが呈示したこうした見取り図は、ドゥルーズがちょうど20年前に発表したごく短いエッセイのなかで示したプログラムを発展させたものにほかならない[7]。

ドゥルーズによれば、かつての規律社会は、家族・学校・工場・病院・監獄といった「監禁の環境を組織する」ことによって稼働していた。そこにおいて諸個人は――家族から学校へ、学校から兵舎へ、兵舎から工場へ、というように――ある閉じられた環境から別の閉じられた環境へと、諸制度の壁を出入りしつつ、移行をくりかえしていたのである。しかし今日、規律社会を構成していた諸制度はことごとく危機に瀕し、それらの壁は崩れ落ちつつある。つまり、いまや私たちは、「あらゆる監禁の環境に危機が蔓延した時代を生きている」わけであり、またそのようにして「規律社会にとってかわろうとしているのが制御社会にほかならないのである」[8]。

むろん、制御社会への移行は、規律そのものが終焉を迎え、消え去ったということを意味するわけではない。それどころか、制御社会において規律は、

6
マイケル・ハート「グローバルな管理社会」拙訳、『思想』、2000年第8号、岩波書店、30-46頁を参照。

7
ジル・ドゥルーズ「追伸――管理社会について」宮林寛訳、『記号と事件』、河出文庫、2007年、356-366頁。なお、ドゥルーズの“les sociétés de contrôle”は、これまで一般的に「管理社会」と訳されてきたが、本稿では、北野圭介氏の提案を踏まえて、「制御社会」と訳すことにする（北野圭介『制御と社会――欲望と権力のテクノロジー』［人文書院のホームページ上で連載中］を参照）。その理由は、「管理」という語が、官僚制的な上からのリジッドな統制という含意を色濃く帯びているのに対し、「制御」という語は、（技術的には）サイバネティクス的なコントロール、（社会的には）分散型のダイアグラムにもとづく柔軟なネットワークの調整やマネージメントといったものと密接に関連しているからである。

8
ドゥルーズ、前掲、357-358頁（一部、訳語を変更させていただいた）。

ヘビのうねりのような柔軟性と可動性をもって社会的領野の隅々にまで浸透しているのである。またそれと連動して権力は、人びとの生をくまなく包囲するようになる。このような仕方で、いまや規律の論理は、諸制度の壁の崩壊にともない、社会的領野の全体にわたって流動的なかたちで一般化されるにいたったとみなすべきだろう。ドゥルーズが差し出した鮮明なイメージを踏まえていいかえるなら、モグラの構造化されたトンネルが、ヘビの無限のうねりに置き換えられたわけである。規律社会が固定的かつ個別的な鋳物を鋳造するものであるのに対して、制御社会は柔軟かつ調整可能なネットワークをとおして機能するものなのである、「まるで、刻一刻と鋳型のかたちが変化しつづけてゆくような自己変形的な鋳造作業のごときもの、あるいはまた、網目の大きさがポイントごとに変化してゆくような篩(ふるい)のごときものであるかのように」[9]。

このように、規律社会が「組織体に所属する各成員の個別性を型にはめる」ことへと向かうのに対し、制御社会はそのさまざまのレヴェルにおいて数多くのパラメーターを調整することを通じ、私たちの主体性やアイデンティティを絶えず分解しつつ再構成することへと向かう。ドゥルーズは言う、「いま目の前にあるのは、もはや個人と群れの対ではない。分割不可能だった個人(individus)は分割によってその性質を変化させる「可分性」(dividuels)となり、群れのほうもサンプルかデータ、あるいはマーケットか「データバンク」に化けてしまう」[10]、と。制御社会が私たちに指し示しているのは、個々人のアイデンティティが分散型の情報ネットワークへと流入し、溶解してゆくという事態にほかならない。そこでは、固定されたアイデンティティを保証するものであった「署名」(とそれを記録する文書)が、あるサーヴィスから別のサーヴィスへと次々に接続するための示差的なアクセスを調節する「パスワード」(とそれを入力するコンピュータ)にとってかわられる。そして、そのようにして、グローバルな制御社会においては、個体化の分散的な様式が作動することになる。また同時にその様式は、個々人のクレジットカードの使用履歴やブラウジング履歴、信用評価や消費者プロファイル、医療記録や生体認証情報といった一連のミクロなデータの流れや集積に応じて微細かつ無際限に変化しながら、調整されつづけることになる。制御社会におけるコントロールは、遠隔操作(リモート・コントロール)やコントロール・ルームといった言葉が連想させがちな、〈管理〉や〈操作(マニピュレイション)〉にかかわるものというよりは、脱中心化された分散的な〈調整(モジュレイション)〉にかかわるものなのである。

「規律社会」から「グローバルな制御社会」への移行を――主にドゥルーズとネグリ&ハートに即して――跡づけてきた私たちは、さらにそれと重ね合わせて、「国家のイデオロギー諸装置」から「〈帝国〉の情動諸装置」への移行についても考察しておく必要があるだろう。かつてルイ・アルチュセールは、その影響力のある論文「イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置」(1970年)のなかで、諸個人を安定し一貫した〈主体=臣下(サブジェクト)〉へと成型し、

9
ドゥルーズ、前掲、359頁(一部、訳語を変更させていただいた)。

10
ドゥルーズ、前掲、361頁。

規律化するためのイデオロギー的呼びかけとその国家装置のメカニズムについて、見事な分析を施した[11]。こうした「国家のイデオロギー諸装置」は依然として機能しつづけているが、現在のグローバルな制御社会の動態を的確に把握するためには、「〈帝国〉の情動諸装置」という視点の導入が不可欠であると考えられる[12]。

〈帝国〉の情動諸装置は国家のイデオロギー諸装置とは異なり、イデオロギーではなく情動をとおして作動し、諸国家の領域を横断するグローバル資本と連動している。またそれは、電子メディアのネットワークやブランドなどのマーケティング戦略によって織り上げられた、新しいグローバルな消費文化と一体になって、情動のフローを調整するマシーンでもある。国家のイデオロギー諸装置がフォーディズム的な「規律社会」やマルクスの言う「形式的包摂」に対応するものであったとするなら、〈帝国〉の情動諸装置はポストフォーディズム的な「制御社会」や「実質的包摂」に対応するものである、と言えよう。〈帝国〉の情動諸装置は、評価プロファイル・選択リスト・個人識別番号・遺伝子情報といったものに凝集しているさまざまのポテンシャリティを微細に調整しつつ、情動やムードや潜在能力を絶えずコントロールすることを通じて、価値を生産し、捕獲することをめざすのである。

このように、国家のイデオロギー諸装置が諸個人を主体＝臣下として規律化するマシーンであるのに対し、〈帝国〉の情動諸装置は諸個人を「可分性」へと分割しつつ、それらの微細な情動のフローを調整し、組織するマシーンである。次節では、文化産業からグローバル文化産業への移行について振り返りながら、〈帝国〉の情動諸装置の強力な範例としてブランドの論理を取り上げ、それを解析することにしよう。

3　グローバル文化産業とブランドの論理

社会学者のスコット・ラッシュとシリア・ルーリーはその共著『グローバル文化産業』で、近年のグローバル化の動きが、それまでとは根本的に異なる作動様式を文化産業にもたらした、と指摘している。彼らによれば、文化がまだ基本的に上部構造に属するものであった、1945年から1975年までの時期においては、人びとが日常生活でもっぱら出会うのは、経済的下部構造を土台にして生産される物質的な財（ことに規格化された工業製品）であった。しかし、20世紀最後の四半世紀に――とりわけ90年代以降、加速度的に進行したグローバル化・情報化・金融化の流れを受けて――、文化（および文化的事物（オブジェ））は上部構造からじわじわとしみ出して、下部構造へと浸透してゆき、ついには下部構造そのものを占拠するにいたったのである。ラッシュ＆ルーリーはこう述べている。

11
ルイ・アルチュセール「イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置」西川長夫・伊吹浩一・大中一彌・今野晃・山家歩訳、『再生産について』、平凡社、2005年、319-378頁。

12
Adam Arvidsson, *Ethical Economy*, Chapter 3, http://integralvisioning.org/article.php?story=p2p157#_Toc161033323（2010年10月1日にアクセス）。

いまや文化はいたるところにある――情報として、コミュニケーションとして、ブランド製品として、金融サーヴィスとして、メディア・プロダクツとして、輸送サーヴィスやレジャー・サーヴィスとして。このようにいたるところに見出される文化的存在物は、もはや例外として扱われるものではなくて、通常のルールとなっているのだ。……いま私たちの前にその姿を現しつつある、グローバル文化産業の時代においては、文化が経済的なものと日常生活の経験の両方を支配しはじめているのである……[13]。

見られるように、ここでラッシュ＆ルーリーは、グローバル化の時代が進むにつれ、日常生活や経済的生産過程のなかで文化の果たす役割がますます中心的かつ強力なものになってゆくという論点を強調している。いうまでもなくこれは、かつてのホルクハイマー／アドルノの認識を逆転させたものである。なぜなら、『啓蒙の弁証法』の著者たちにとって憂慮すべき問題だったのは、文化的上部構造が経済的下部構造の侵襲を受け、手段－目的合理性が支配する商品の論理にそれが包摂されてしまうことだったのだから[14]。

しかし今日、グローバル文化産業や情報資本主義にとって重要なのは、下部構造が上部構造を決定し、それを取り込んでしまうといった過去の方式ではなく、文化的上部構造の方が物質的土台へとなだれ込み、それを根本的に変質させてしまっているという、現在進行中のプロセスなのである。こうした過程のなかで、「財は情報的なものに、労働は情動的なものに、所有権は知的なものになり、かくして経済はますます文化的なものになってゆく」[15]だろう。

ところで、これまでみてきたラッシュ＆ルーリーの議論の中心にあるのは、〈グローバル文化産業がブランドをとおして作動する仕方〉というテーマである。かつての文化産業が商品化の原理をとおして作動していたとすれば、現在のグローバル文化産業はブランディングの原理をとおして作動している、というのが、彼らの基本的な認識なのである。

この点に関して付け加えておくと、近年、斬新な視角から画期的なブランド論を展開している、メディア社会学者のアダム・アーヴィッドソンは、ラッシュ＆ルーリーのこうした認識を踏まえたうえで、「ブランドは情報資本主義の論理を模範的なかたちで具現化したものにほかならない」[16]、とさらに明快に述べている。じっさい、現在、市場にあふれかえっている多種多様なブランド消費財はもちろんのこと、マクロな規模では国家（シンガポール、アイルランド、等々）や都市（バルセロナ、ベルリン、等々）のブランド構築から、ミクロな規模ではMySpaceやFacebookのような〈ソーシャル・ネットワーキング・サーヴィス〉を用いた個々人のパーソナルなブランド管理にいたるまで、いまやブランドの論理は情報資本主義の展開と連動した社会編成のパラダイムとして機能している、といっても過言ではないだろう。

また同じく留意しておきたいのは、かつてのフォーディズム的な産業資本主

13
Scott Lash and Celia Lury, *Global Culture Industry: The Mediation of Things*, Polity, 2007, p.4.

14
ホルクハイマー／アドルノ『啓蒙の弁証法』徳永恂訳、岩波文庫、2007年。また、かつてホルクハイマー／アドルノが批判的に解析した〈魂の工場〉としての文化産業が、いまや〈魂の工場2.0〉へとヴァージョンアップしながら、社会全体に拡大し、人びとの生の隅々にまで浸透しているという点については、拙稿「〈魂の工場〉のゆくえ――ポストフォーディズムの文化産業論」、『アジアのメディア文化と社会変容』斉藤・高増編、ナカニシヤ出版、2008年、164-193頁を参照。

15
Lash and Lury, *Global Culture Industry*, 7.

16
Adam Arvidsson, *Brands: Meaning and value in media culture*, Routledge, 2006, 13.

義の時代に〈工場〉がその価値形成の論理を示す範例であったのと同じように、今日のポストフォーディズム的な情報資本主義の時代においては〈ブランド〉がその価値形成の論理を示す範例となっているという点だ。以下ではこの点について、やや詳しく分析することにしたい。

まず、情報資本主義という概念について簡単に整理しておけば、これは次の二つの特徴を備えたものとして呈示されるだろう。第一の特徴は、ネグリ＆ハートの非物質的労働という概念とも関連するのだが、情報資本主義がアイディアやサーヴィスや情報といった非物質的な財の生産にもとづいているという点に求められる。むろん、このことは、物質的生産が消滅したなどという現実離れした事態を指し示しているわけではなく、たんにそれがヘゲモニーを失い、副次的なものになりつつあるという傾向を指し示している。つまり、企業やその他の経済的アクターたちにとって、知識やイノヴェーション、デザインやライフスタイルを生産することの方が、それらの情報を運ぶ物質的製品を作ることよりも、より大きな戦略的重要性をもつようになってきている、ということである。

次に情報資本主義の第二の特徴は、そのように決定的な重要性をもつ非物質的生産をますます社会化し、その生産現場を拡大していっているという点に求められる。すなわち、情報の生産は、従来のように内部の供給源――たとえば、会社が直接に指令を下すことのできる有給の従業員のスキルといったもの――に依拠することから、外部の非物質的生産性――いわゆる「クラウドソーシング」の場合のように、会社の外部にある、ネットワークで結ばれた「群衆（クラウド）」の一般的な知恵といったもの――を領有し、価値化することのできる能力に依拠することへと、次第に向かいつつあるのである。

ブランドは、情報資本主義のこれら二つの特徴をいち早く、しかもきわめて洗練された仕方で明確に具体化したものである、と考えられる。なぜなら、まず、ブランドはここ30年ほどのあいだに、非物質的資本としてのその価値を急速に高めてきているからだ（たとえば、マクドナルド・コカコーラ・ナイキといった企業にとって、もっとも価値のある資産は――不動産などの有形資産ではなくて――それぞれのブランドの公的な評価にほかならない）。しかし、またもう一方でブランドの価値は、広告の製作者やブランド・マネージャーたちの努力に懸かっているというよりも、消費者や一般的な公衆の努力に懸かっている、と捉えるべきである。消費者とブランドのあいだの関係、さらにはブランドを介した消費者間の関係こそが、ブランドの価値を決定する源なのである（この意味で、情報資本主義では――産業資本主義とは異なり――、〈生産〉と〈流通〉・〈消費〉とのあいだの区別が曖昧化してゆくことになる）。

このように、ブランドの価値の大きさは、その売上高のみによって決定されるのではなく、製品が社会体のなかを流通する過程において消費者に喚起する情動的かつ関係的な複合性（すなわち、消費者の側からのアテンション（ブラ

ンドに向けられた注目や注意)・ロイヤリティ(ブランドに対する忠誠や献身、不断のサポート)・社会的ランクづけといった直接的評価)を含むかたちで多重決定されるのである。またそれゆえ、現在のブランド・マネージメントは、消費者に規律を押しつけようとはせず、その反対に率先して消費者に能力を吹き込こもうとするだろう。

多数の消費者がブランドを共通の環境やプラットフォームとして利用しながら情動的な関係性のネットワークを構築してゆくこと——繰り返すが、これこそがブランドの価値の源となるものなのである。そのうえでブランド・マネージメントがめざすのは、そうした大勢の人びとの情動やさまざまの情動間のネットワークを監視(モニタリング)し、制御(コントロール)し、調整(モジュレイト)することを通じて、それらを取り込み、領有しながら、資本蓄積にとって望ましい方向性へとそれらを価値づけてゆくことにほかならない、と指摘できるだろう。

かつてマルクスは、大工業の発展につれて現実的な富の創造が、直接的な労働時間の量に依存するものから、「社会的頭脳の一般的生産諸力の蓄積」としての「一般的知性」に依存するものに移り変わってきている、ということを明示してみせた[17]。マルクスが産業資本主義の時代にすでに見通していたこのような傾向は、ポスト産業資本主義とも認知資本主義とも呼ばれる新たな価値の生産様式が現出している今日、ますます顕著なものとなっている。いまや一般的知性は、かつてのように工場内に設置された固定資本としての機械のなかに吸収されてしまうのではなく、工場の壁を越えて社会全体へと広がり、大都市(メトロポリス)という社会化された工場内で協働する労働力の生きた身体に転位されるようになっている、とみなすべきだろう[18]。

情報資本主義の鍵となる原理は、このように基本的に外部に存在する、しかも相対的に自律した「一般的知性」ないしは「大衆知性」を、生産的源泉として取り込み、領有することにある。なぜなら、すでにブランドについてみたように、情報資本主義における価値創造は、商品の生産をとおしてのみならず、商品を社会体のなかで流通させ、その過程で発生するさまざまの生産的実践の諸結果を領有することをとおしても同様に遂行されるからである。ブランドはそうした価値創造の原理を模範的な仕方で具現化したものだ。またそれは、消費者にとっては価値の生産手段でもあり、資本にとっては価値の捕獲手段でもある。

こうした視点からすると、〈生産と消費のインターフェイス〉としてブランドを理解しようとする従来の枠組みは、もはや不十分なものとしか映らないだろう。ブランドはすでにそうした枠組みを超えて、たんなる生産と消費の界面にはとどまらないものとなっており、商品の社会的流通を支えている消費活動そのものを生産過程の内部に取り込むメカニズム、換言すれば、生産的な「大衆知性」を触発すると同時に監視しながら、それを領有して価値化する機能を帯びた、「脱領土化された工場」[19]とでも呼ぶべきものになっているのである。

17
カール・マルクス『資本論草稿集②』資本論草稿集翻訳委員会訳、大月書店、1997年、471-504頁を参照。

18
クリスティアン・マラッツィ「機械=身体の減価償却」多賀健太郎訳、『現代思想』第35巻第8号、青土社、2007年、52-69頁および、拙稿「追伸——〈金融〉と〈生〉について」、マラッツィ『資本と言語』柱本元彦訳・水嶋一憲監修、人文書院、2010年、167-189頁を参照。

19
Arvidsson, *Brands*, p.94.

このように、いまや工場の壁を越え、メディア文化および日常生活と一体となって社会全体に拡散しているブランドは、社会的コミュニケーションを通じて織り上げられた大衆知性と資本によるその捕獲作用が出会う、まさに社会化された工場として捉えられるべきだろう。そして、このような社会化された工場としてのブランドは、グローバルな情動のフローを調整する〈帝国〉の情動諸装置の一つとして機能しているのである。

4　コミュニケーション資本主義と情動のポリティクス

ブランドが範例的な仕方で示しているように、今日の情報コミュニケーション・ネットワークは、本質的に情動にもとづくネットワークにほかならない。安心感や満足、楽しみや興奮といった諸種の情動を生み出したり、調節したりする〈情動労働〉から、ブログやツィッター・ユーチューブ・フェイスブックといった〈ソーシャル・ネットワーク〉による相互作用のフローにいたるまで、「あらゆるコミュニケーションの形態は……情報の生産と、情動の生産とを組み合わせているのである」[20]。

ネグリ＆ハートの〈帝国〉論にとって、グローバルなコミュニケーション・ネットワークはきわめて重要な意味をもつ。なぜなら、これまで見てきたように、〈帝国〉的コントロールとコミュニケーション・ネットワークは分かちがたく結びついているからだ。グローバルな制御社会としての〈帝国〉にとって、コミュニケーション的生産はその不可欠のパートナーなのである。それゆえネグリ＆ハートは、インターネットを始めとするニュー・メディアがたんに解放的な側面のみを有するものではなくて、根本的にはグローバルな制御社会と一体になって機能するものであるということをはっきりと見抜いているわけである。だとすれば、次に引用する、『〈帝国〉』のなかのインターネットに関する記述は、制御社会とコミュニケーションのあいだの関係をめぐるネグリ＆ハート自身のそうした明察とは齟齬をきたす、些か一面的かつ楽観的な分析である、と言わざるをえないだろう。

> 民主的なネットークは、完全に水平的で脱領土化されたモデルである。インターネットは……この民主的なネットワーク構造の主要な例である。そこでは不定形で、潜在的に無制限の数の、相互につながった節点がコントロールの中心点ももたないままコミュニケートし合っている。……インターネットの……設計の基本要素、すなわち脱中心化は、また同時にネットワークのコントロールをきわめて困難にしているものでもある。……こうした民主的なモデルは、ドゥルーズとガタリがリゾームと呼ぶもの、すなわち非－階層的で非－中心的なネットワーク構造にあたるものである[21]。

20
ネグリ＆ハート『マルチチュード』(上)、前掲、185–186頁。

21
ネグリ＆ハート『〈帝国〉』、前掲、384–385頁。

インターネットに関するこのような記述は――現在のように〈ソーシャル・ネットワーク〉が普及する以前の〈情報ハイウェイ〉について論じられたパートのなかの一節であるという時代的な制約を考慮に入れるなら、やむをえない一面もそこには含まれていたと言えるかもしれないが、いずれにしても――精確さを欠く。というのも、インターネットは脱中心的ではなく分散的なネットワークからなり、またそれは高度にコントロールされているからである。メディア生態学者のアレクサンダー・ギャロウェイが的確に指摘するように、インターネットとはグローバルな分散型のコンピュータ・ネットワークのことであり、そのプロトコルとは、〈脱中心化の後でコントロールを作動させるための分散型マネージメント・システム〉のことなのである[22]。またそのさい、〈新たなコミュニケーション・テクノロジーは中心的な指令や階層的コントロールにもとづくものではないのだから、そこでは指令そのものが消失しているという、楽観的な見方〉に抗する必要がある。私たちの生きている社会は、こうしたインターネットと相同の論理、いいかえれば、脱中心化の後に登場した分散という新たなダイアグラムによってその隅々までコントロールされているのだ。

このように、ネグリ＆ハートが呈示した〈帝国〉的（または社会的な）コントロールの論理と、インターネットを始めとするニュー・メディアのプロトコル的（または技術的な）コントロールの論理とは相同であり、両者はコミュニケーションという概念を通じてしっかりと結び合わされ、互いにその力を強め合う関係にある、と捉えるべきだろう。じっさい、ネグリ＆ハートは――そのインターネットに関する不精確な記述にもかかわらず――このような結びつきや関係性を明確に把握しており、次のように言い切っている。

> コミュニケーションとは、資本主義的生産の形態である。その形態においてはあらゆるオルタナティヴな通路を封殺しながら、資本が完全かつグローバルに社会をその体制に従属させることに成功したのである。もしオルタナティヴが提起されうるとしたら、それは実質的に包摂された社会の内部から生じ、その心臓部であらゆる矛盾をはっきりとあぶり出すものでなければならないだろう[23]。

見られるとおり、かつて近代の政治理論家たちが唱えていた、民主化を促進するものとしてのコミュニケーションの働きは、いまや〈帝国〉の論理によって実質的に包摂されてしまったわけである。情報と情動が組み合わさったグローバルな生産と流通のネットワークの内部にあって、コミュニケーションそのものが〈帝国〉の指令として機能している、という側面を見逃してはならないだろう。

この点に関して政治学者のジョディ・ディーンは、コミュニケーションをヘゲモニー的な生産形態とする、そのような編成のことを、「コミュニケーション資本主義」と呼んでいる[24]。ごく大まかにいって、「産業資本主義が労働力の搾取

22
Alexander R. Galloway, *Protocol: How Control Exists after Decentralization*, The MIT Press, 2004を参照。

23
ネグリ＆ハート『〈帝国〉』、前掲、436頁。

24
Jodi Dean, *Democracy and other neoliberal fantasies*, Duke University Press, 2009や、*Blog Theory*, Polity, 2010を参照。

にもとづいていたのと同じように、コミュニケーション資本主義はコミュニケーションの搾取にもとづいているのだ」[25]。またそれゆえ、コミュニケーション資本主義におけるコミュニケーションは、かつてユルゲン・ハーバーマスが示唆したような、理解に到達することを志向する行為をさすものではない[26]。別の言い方をすれば、ハーバーマスの呈示したコミュニケーション的行為のモデルにおいては、そのような指向性にもとづいたメッセージの使用価値こそが重要であったのに対し、現在のコミュニケーション資本主義においては、情動や情報のフロー／サーキュレイション／プールに寄与すること、つまりはメッセージの交換価値の方がその使用価値よりも重視されるのである。

ブログやツィッター・ユーチューブ・フェイスブック等々をとおして間断なく循環し、流通しつづける、さまざまの寄与――つぶやきや文章、音楽やサウンド、写真や動画、ゲームやヴィデオ、コード・ウィルス・ボット・クローラの諸断片、等々――は、必ずしも自分が理解されることを必要とはしていない。むしろ、それらがぜひとも必要としているのは、反復され、複製され、転送されるという、サーキュレイションのプロセスそのものなのである。つまり、それらさまざまの寄与は、作成され、アップロードされ、サンプリングされ、解体されながら、リンクからリンクへと転送されたり、コメントを付け加えられたり、ストアされたりするわけだが、そうしたプロセスのなかでそれらが望んでいるのは、メッセージの内容が理解されたり、それに対して応答が返されたりすることであるというよりも、それらの寄与がよりいっそう循環し、流通しつづけてゆくという絶え間ない運動状態それじたいなのである。このように、コミュニケーション資本主義における情報と情動のフローは、いまや終わりのない、果てしなくつづくループをかたちづくっている、と考えるべきだろう。ディーンが示唆するように、「それじたいのために存続する、こうしたエンドレスなループこそが、いわゆる「オールド」・メディアと「ニュー」・メディアのあいだの差異を際立たせるものである。オールド・メディアがメッセージを伝達しようと努めるのに対し、ニュー・メディアはたんに循環（サーキュレイト）・流通することそのものを求めるのだ」[27]。

このように、欲動を通じて駆動する享楽的なコミュニケーションへと政治を縮減してしまうようなコミュニケーション資本主義の内部にあって、さまざまの寄与を果てしなく循環（サーキュレイト）・流通させつづけるループに亀裂を入れることのできるメディア・ポリティクスや、〈帝国〉の情動諸装置による捕獲や制御から逃れることのできる情動のポリティクスは、いかにして可能なのだろうか。

なるほどたしかに、コミュニケーション資本主義の転覆を性急に希求することは、「オールド・メディア」的なファンタジーにすぎない、と改めて言わなければならないのかもしれない。けれども、ドゥルーズ（とフェリックス・ガタリ）を引き継きながら情動の論理と政治を探究してきた、哲学者のブライアン・マッスミとともに確認しておく必要があるのは、そもそも「情動の論理」は「コミュ

25
Dean, *Blog Theory*, 4.

26
ユルゲン・ハーバーマス『コミュニケーション的行為の理論』（上）（中）（下）平井俊彦・藤沢賢一郎・丸山高司ほか訳、未来社、1985-1987年。

27
Dean, *Blog Theory*, 121.

ニケーションの論理」に還元されるものではない、という点だ。そうではなくて「情動の論理」は、「諸々の出来事に適用される一連の反復と差異の論理」、一言でいえば、「出来事の論理」と結びついたものであり、またそれは、「間主体性と呼ぶには、あまりに雑多で密集した関係性が芽吹くフィールド」において生じるものなのである[28]。

翻ってドゥルーズを参照するなら、「出来事」とは、「さまざまの可能なことからなる新空間を開く不安定状態のことである。……出来事は可能なことを開くのだ。それは社会の深みや諸個人の内部に浸透してゆく」[29]。このような仕方で、出来事によって諸々の可能なことが創り出され、またそれらを通じて諸々の〈特異性〉がかたちづくられるのである。〈特異性(シンギュラリティ)〉は、〈同一性(アイデンティティ)〉とは異なり、多数多様性や生成変化と不可分の関係にある。それぞれの特異性は、他のさまざまの特異性と関係するものであると同時に、それ自体の内部に多数多様性を抱えている。したがって、各々の特異性はつねに、いまとは違うものに生成変化するプロセスのただなかにあるわけだ。私たちはネグリ&ハートにならって、そのようなさまざまの特異性のあいだの相互作用をとおして織り上げられるプロセスのことを、〈コモン〉と呼ぶことができるだろう[30]。

情動の論理から出発することによって私たちは、出来事がもたらす切断と持続的な変容プロセスへと招き入れられ、〈諸々のアイデンティティからなる共同体〉を〈諸々の特異性からなるコモン〉へと開いてゆくプロセスに組み入れられることになる。それゆえ、情動の論理がそのまま情動の政治と直結していることは明らかだろう。出来事の生成と諸々の特異性のあいだの出会いを組織することを通じて、さまざまの境界を突き破りつつ、コモンを内的に構成してゆくこと——こうした構成的プロセスや実験作業と連携する情動のポリティクスこそが、コミュニケーション資本主義のエンドレス・ループを失調させながら、〈帝国〉の情動諸装置による捕獲や制御から逃れることのできる可能性を私たちにもたらすものではないだろうか。

28
"Of Microperception and Micropolitics" —an interview with Brian Massumi, *INFLeXions* issue 3, http://www.senselab.ca/inflexions/volume_3/node_i3/PDF/Massumi%20Of%20Micropolitics.pdf (2010年10月1日にアクセス)。

29
ジル・ドゥルーズ「68年5月[革命]は起こらなかった」杉村昌昭訳、『狂人の二つの体制1983-1995』、河出書房新社、2004年、51-52頁(一部、訳語を変更させていただいた)。

30
Hardt and Negri, *Commonwealth*, 320-344を参照。